

神さまが知っているさ

新免光比呂（しんめんみつひろ）
民族文化研究部

ル

ルーマニアで日本人旅行者をバスで案内したときの話。

旅も最後にさしかかり、首都ブカレストに帰る日の夕方、食事に間に合うためには七時までにホテルに着かなくてはならなくなつた。心配するガイドに運転手がいった。

「大丈夫だ、七時までに着いてみせる。賭けてもいい」

その言葉どおり、バスは六時五五分にホテルに着いた。

運転手が言った。

「どうだ。約束どおりだったろう。さて、誰



村人の篤い信仰があらわれるミサの場面

が賭け金を払ってくれるんだい？」

ガイドと添乗員と私が顔を見合わせたとき、ふと私の口から次の言葉が出た。

「Dumnezeu stie」(強いて訳せば、「神さまが知っているさ」)

運転手とガイドは爆笑して、賭け金の話は雲散霧消した。ガイドは笑いながらいう。

「あなたは、ルーマニアのことを本当によく知っていますね」

Dumnezeu stie (ドゥムネゼウ・シネテイエ)とは、翻訳すると、英語ではGod knows、仏語でDieu le sait、日本語では、「神は知り給う」ということになるのか。訳してしまえば、キリスト教圏でよく耳にするフレーズである。とりわけおもしろくもなんともない。だが、ルーマニア人と話しているときに、この言葉が出るとルーマニア語らしい含みに気づく。

この言葉の背景をちよつと探ってみると、ルーマニア人の独特な性格とその歴史、さらに特有のキリスト教によって織りなされたルーマニアのものが関わっているようだ。

こ

ルーマニア人は、明るい性格でものことにこだわらず、出来事の結果を苦にして悩まない反面、諦めやすく大まかな性格だといわれる。これが単なる偏見から生まれた印象だといいきれないのは、近代ルーマニア文化史を彩るパラド論争すらルーマニア人の性格を対象としていたからだ。

このパラドは、ミオリツァとよばれる。心優しい羊飼いに嫉妬した仲間たちが殺害計画を企てる。たくらみを知った子羊が狙われていることを告げるが、羊飼いは従容として死を受け入れるという内容だ。論争は、主人公が示す運命に対する死をかけた受動的な態度を、ルーマニア民族の典型的な態度か否かを重要なテーマとしたのである。

その論争が現実味をもつて人びとを動かしたのは、ハプスブルク帝国やオスマン帝国など他民族の帝国に支配されたルーマニアの長い歴史のせいであるだろうし、ルーマニア人の精神形成に大きな影響を与えたキリスト教の性格にもよるだろう。

このキリスト教は、カトリックやプロテスタントとならぶ東方正教という宗派に属するルーマニア正教である。その信仰のかたちは、懐疑的、合理的というよりも、信仰する人たちの従順で情緒的な性格を強く示している。さらに罪に対する強迫的なこだわりもみうけられないようだ。(世界的な宗教学者ミルチャ・エリアアデは、これを南東ヨーロッパに特有の「宇宙的キリスト教」とよんだ。)

つまり、この二つの事柄の結びつきが示しているのは、物事に執着せず、自分の責任にも拘泥せず、おおらかに神を信じて、物事の結果から距離をとる態度である。

思わず口をついて出てきた言葉をこゝろさらに説明するのも野暮な話だが、Dumnezeu stie (神さまが知っているさ)という言葉のおかしさは、ルーマニアのなるものから出てくるというよりは、私の勝手な思いこみだろうか。